

地域包括ケア取組状況について

川上村らしい地域包括ケアシステム構築



村民の健康で元気な暮らしがつづく

川上村

1 川上村の現状について

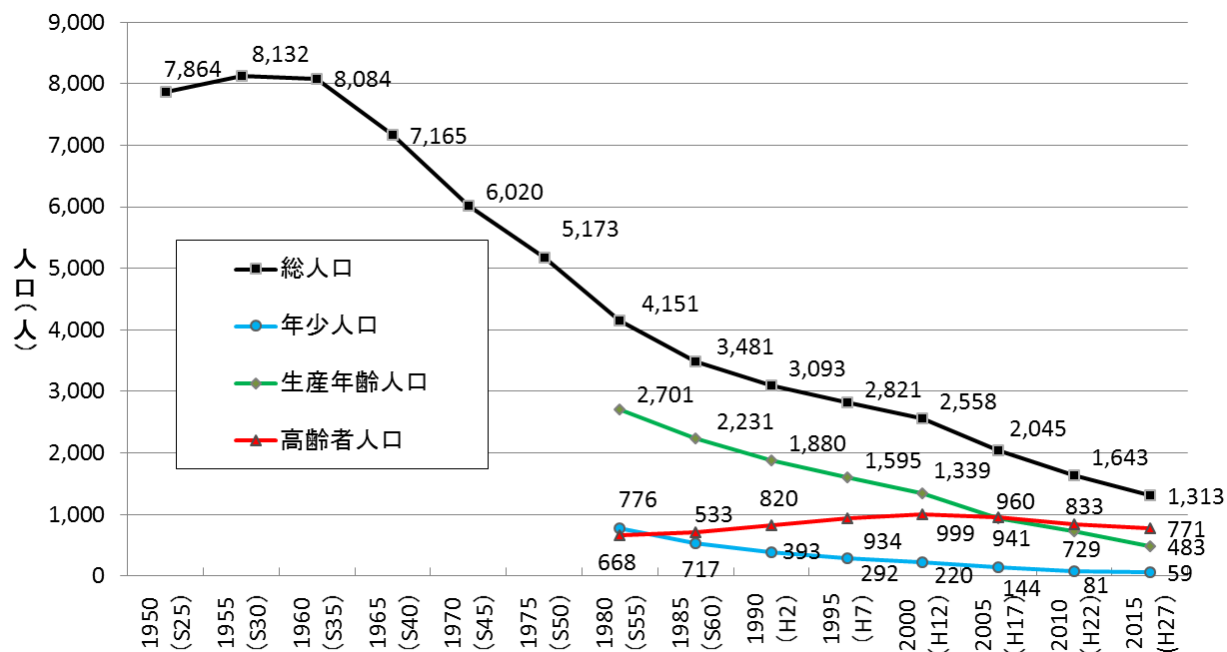
- 奈良県東南部に位置する「水源地の村」
- 人口(H27国勢調査)
 - ・ 総数:1,313人
 - ✓ 年少: 59人(4.5%)
 - ✓ 生産年齢:483人(36.8%)
 - ✓ 高齢者: 771人(58.7%)

- ◆ 昭和30年をピークに一貫して人口減少が続いている
- ◆ 特に生産年齢人口の減少幅が大きい
- ◆ 高齢化率は約59%

- ◆ 一人あたりの介護給付費が低い (H24年度・252,944円)
- ◆ 要介護認定率が低い (H24年度・16.7%)

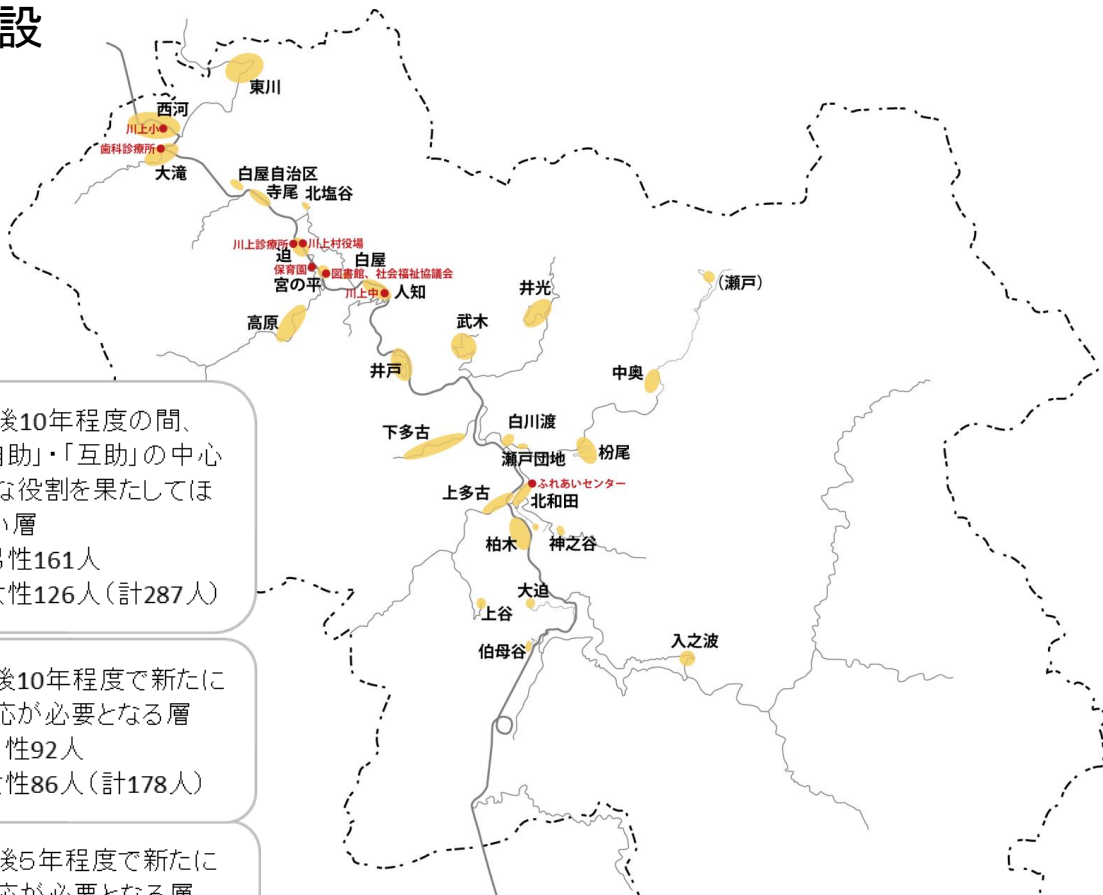
超高齢化は進展しているものの、これまでに取り組んできた高齢者福祉施策は、村の『強み』として蓄積

【国勢調査人口の推移】

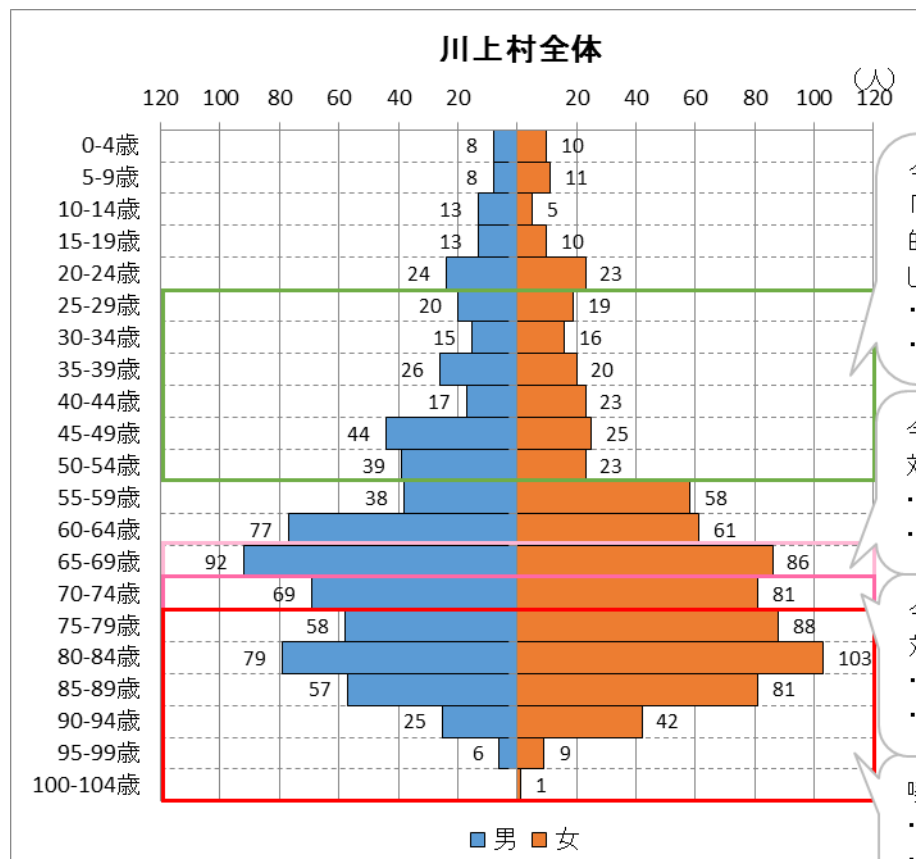


1 川上村の現状について

- 村の中央を貫く国道169号とその支線に中小規模の集落(26大字)が分散
- 保育園、小学校、中学校、診療所が各1施設



【年齢別住民登録者数(H28.4.30時点)】



今後10年程度の間、「自助」・「互助」の中心となる役割を果たしてほしい層
 ・男性161人
 ・女性126人(計287人)

今後10年程度で新たに
 対応が必要となる層
 ・男性92人
 ・女性86人(計178人)

今後5年程度で新たに
 対応が必要となる層
 ・男性69人
 ・女性81人(計150人)

喫緊の対応が必要な層
 ・男性225人
 ・女性324人(計549人)

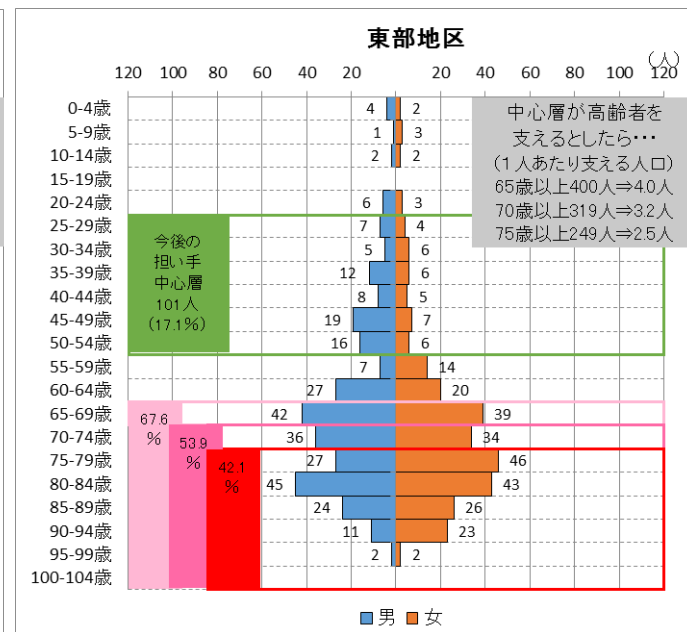
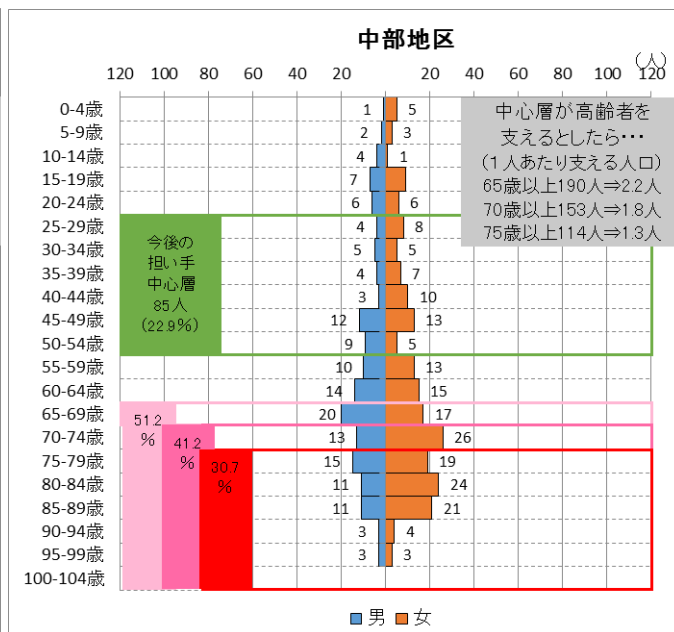
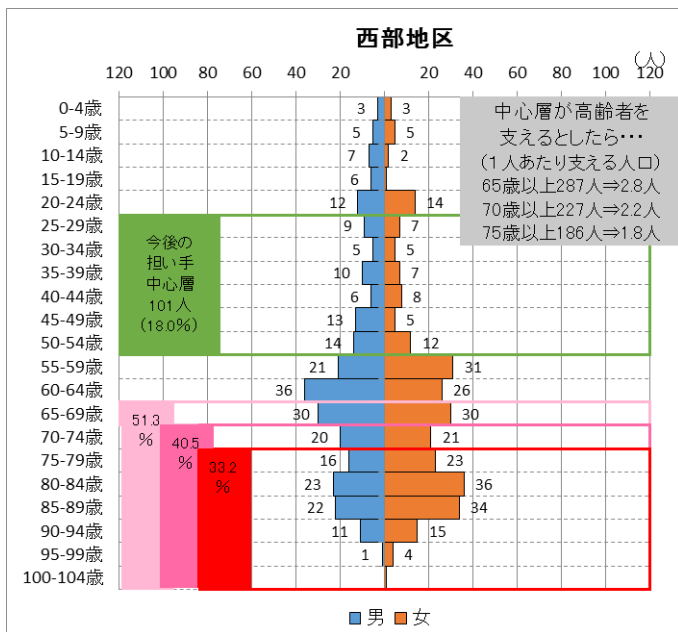
- ◆ いずれの集落も人口構成のバランスが崩壊
- ◆ 各集落の「担い手」(自助や互助の中心層)の不足



1 川上村の現状について

- 近隣市町村と交流しやすい位置にある「西部地区」、役場等の施設が集積する「中部地区」に対して、より山間の「東部地区」の課題が深刻化
⇒「東部地区暮らしがつづく集落づくりプロジェクト」の発意

【年齢別住民登録者数(H28.4.30時点)】



- ◆ 集落を維持するためには、中心層（ファミリー世帯）の定住化が不可欠
- ◆ 喫緊の地域課題に対応するためには、前期高齢者にも中心層としての役割を期待



2 「健康で元気な暮らし」づくりの系譜

H6年度～ 水源地の村づくり

～川上村が源流であることに「普遍的な価値」を見出し、その役割を積極的に果たし、これからも本物の源流であり続けようとする～

H12年頃 ヘルパー養成事業

◆ ヘルパー 2 級 資格
所持者を 26 大字 全
てに 2 名 以上 配置

H25年度・26年度

川上ing作戦

～川上村役場の若手職員等による
ワーキンググループ～

- 村営住宅建設の構想を機に、村民の暮らしに寄り添った調査・分析・対策協議

第5次総合計画 計画期間H27～H36年度
～都市にはない豊かな暮らしの実現～

◆ 住まいと仕事をセットにした取り組みの必要性

- ✓ 住まいと仕事を紹介する「川上ingツアー」の実施
- ✓ 村営シェアハウスの建設

H27年1月 まち・ひと・しごと創生
総合戦略

～「人」・「仕事」・「子育て・教育」・「暮らし」の4つの分野の重点プロジェクトを立案

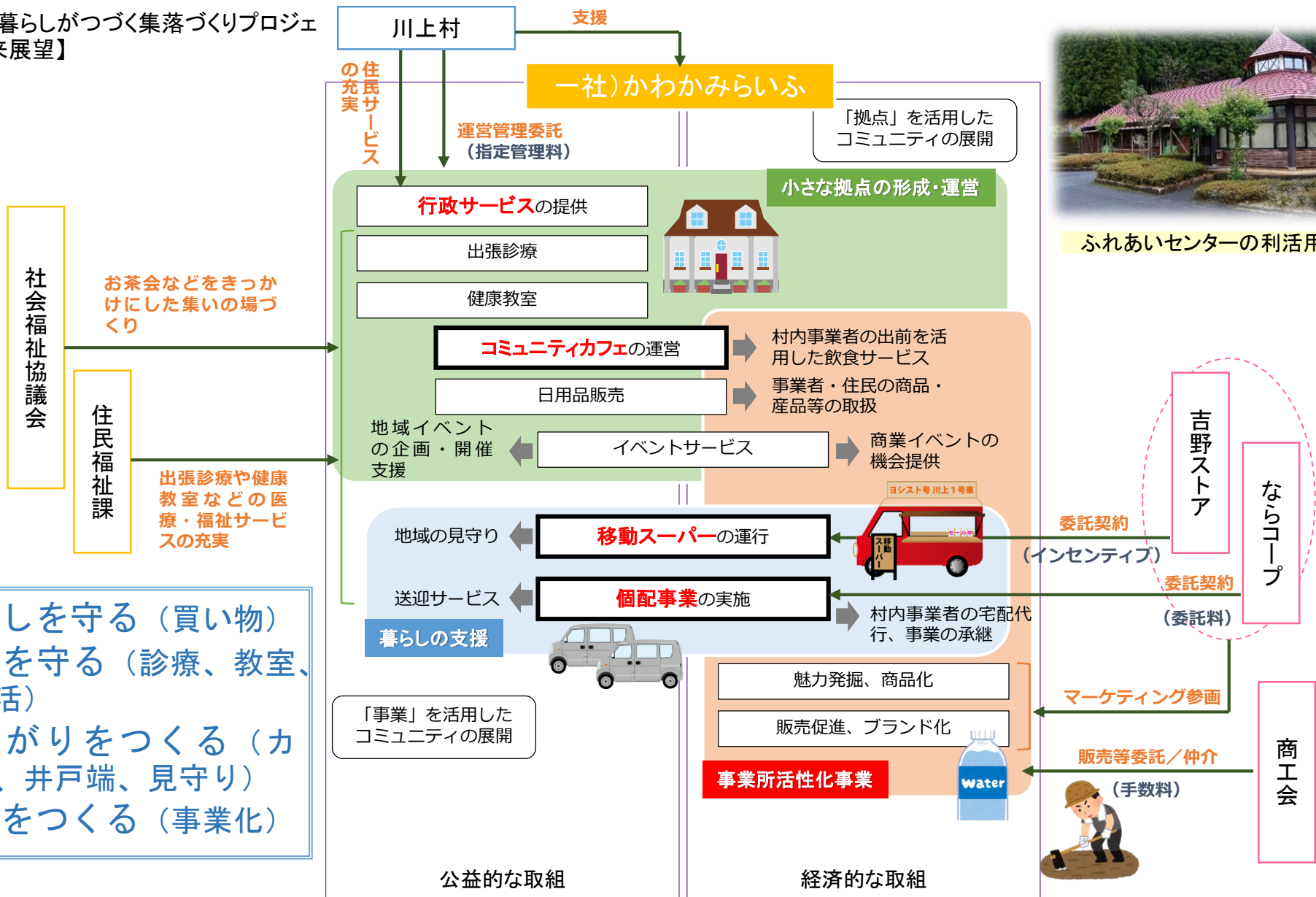
◆ 4分野横断プロジェクトの一つとして、「東部地区暮らしがつづく集落づくりプロジェクト」開始

- ✓ 一般社団法人「かわかみらいふ」の設立
- ✓ 「小さな拠点」の開設、移動スーパー・コープ配達受託



3 東部地区で始まった、村民が何歳になって住みつづけられる「仕組み」づくり

【東部地区暮らしがつづく集落づくりプロジェクトの将来展望】



- ◆ 暮らしを守る (買い物)
- ◆ 健康を守る (診療、教室、食生活)
- ◆ つながりをつくる (カフェ、井戸端、見守り)
- ◆ 仕事をつくる (事業化)



【連携事業】

- 高齢者暮らし調査アンケート
 - ・ 65歳以上の全住民へのヒアリング型アンケートの反映
 - ・ 住民との直接的な対話を通じた気づき
 - ・ 高齢者の暮らしの現状把握・分析

【連携事業】

- 東部地区暮らしがつづく集落づくりプロジェクト
 - ・ 小さな拠点、移動スーパー、個配事業を通じた村民の暮らし情報の収集
 - ・ 東部地区をモデルとしたケーススタディ

- ケア会議等を母体とした、推進体制づくりを意識したワーキング・グループ
 - ・ 実務レベル関係者・専門担当者の意識の共有化
 - ・ ケアシステムの構築と推進に向けた機能強化研修

◆ デザイン思考のプロセスを活用したワークショップ

- 他地域事例の視察研修
 - ・ 一定の方向性が見えた段階で先進地の視察研修を予定（兵庫県朝来市を候補）

- ◆ 小さな拠点で診療所による巡回診療開始（H28.10）
 - ・ キリン堂との連携（薬剤師による出張相談窓口の開設）

- 川上らしい地域包括ケアシステム検討協議会
 - ・ ワーキング・グループの具体的な検討成果を踏まえて、関係機関・住民等の代表者等を交えた構想協議



① コンサルタント委託

- 「かわかみらいふ」の業務支援も行っている(株)価値総合研究所に業務委託

② 高齢者の実態調査

- 別事業としてヒアリング型アンケート調査を実施(H28.8~11)
- 日常的な生活スタイル、食生活、通院、くすり、移動手段、生きがい、人付き合い、集落環境や人口対策など、幅広く情報収集

③ ワークショップ（ワーキング・グループ）

H28. 9.12	ケア会議 (ワーキング・グループ組成)
H28.10.24	ワークショップの方針決定
H28.11. 8	ワークショップ①
H28.11.29	ワークショップ②
H28.12. 6	ワークショップ③
H28.12.13	ワークショップ④
H28.12.20	ワークショップ⑤

◆ フェーズ 1

ペルソナ（モデルとなる人物像）づくり

- ✓ 村民気質や状況を踏まえたタイプ別モデルの設定と、それに寄り添った困り事の抽出

◆ フェーズ 2

- 地域包括ケアシステムづくりの基礎となる「住みつけられる」ための**想いの深掘り**と**着眼点の設定**

- ✓ 抽象化した問題等を起点に真のニーズや問題点の要因をロジカルに分析し、図解化
- ✓ 全体の構図を確認した上で問題認識を共有化するために着眼点を文章化

◆ フェーズ 3

- 村民が「住みつけられる」**問いの設定**と**アイデアづくり**

- ✓ モデルの「幸せ」を導く観点から問いを立て、ブレスト（拡散思考）により解となるアイデアを創出
- ✓ 曼荼羅シートを活用して8つのアイデアに収束し、メンバーの投票（評価）を通じて理解・共有を促進



ワークショップのねらい

- これまでケア会議では、個別のケース支援に関する検討と共有・連携に成果・実績を上げているものの、その対応例から地域課題の解決や改善を図るまでの体制の構築には至っておらず、新たに開発された社会資源(かわかみらいふ等)を有効活用した支え合いや課題解決力を高めるネットワーク化にも至っていない。
- これから構築しようとする『川上らしい』地域包括ケアシステムは、すべての村民(子どもから高齢者・障がい者まで)を対象としてその「幸せ」の実現を支えるものであり、さらには将来的な移住者の暮らし(幸せ)と仕事(社会資源)をもターゲットとして政策形成を図ることが重要である。
- そのため、近視眼的な対症療法、あるいは住民福祉に直接関わる分野・領域だけで解決しようとするのではなく、村づくりを含めた幅広い分析力・発想力を身に付けるために、
 - (1) 村民と接する機会の多い実務スタッフ同士で話し合い、作業(ワークショップ)をすることを通じて、みんなで問題意識や望ましいイメージなどを共有すること。
 - (2) 様々な考え方を持ち寄りながら、新しい気づきを得たり、アイデアを発想したりする思考体験とトレーニングの機会としていくこと。
 - (3) 利用者視点で発想することで、村民の暮らしを良くする(幸せにする)ための本質的な課題や価値(サービス等)を現実的に考え、ふだんの活動の一助としていくこと。

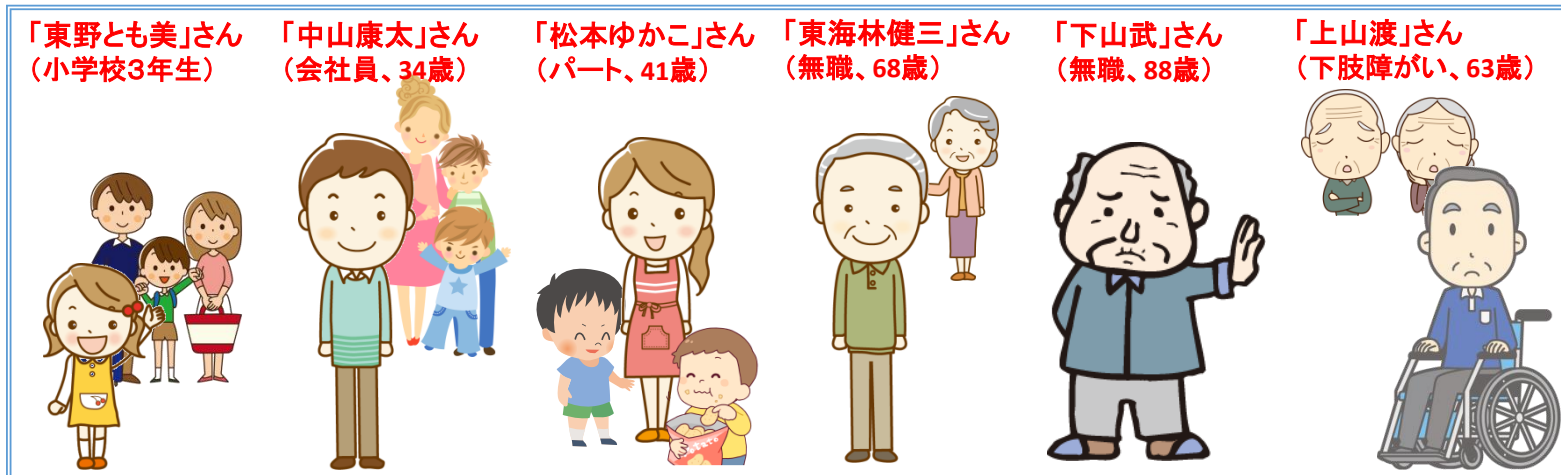
に主眼を置いて実施し、この成果を踏まえて、『川上らしい』地域包括ケアシステムの構築と推進につながっていくことを目指している。



5 取組の進捗状況について

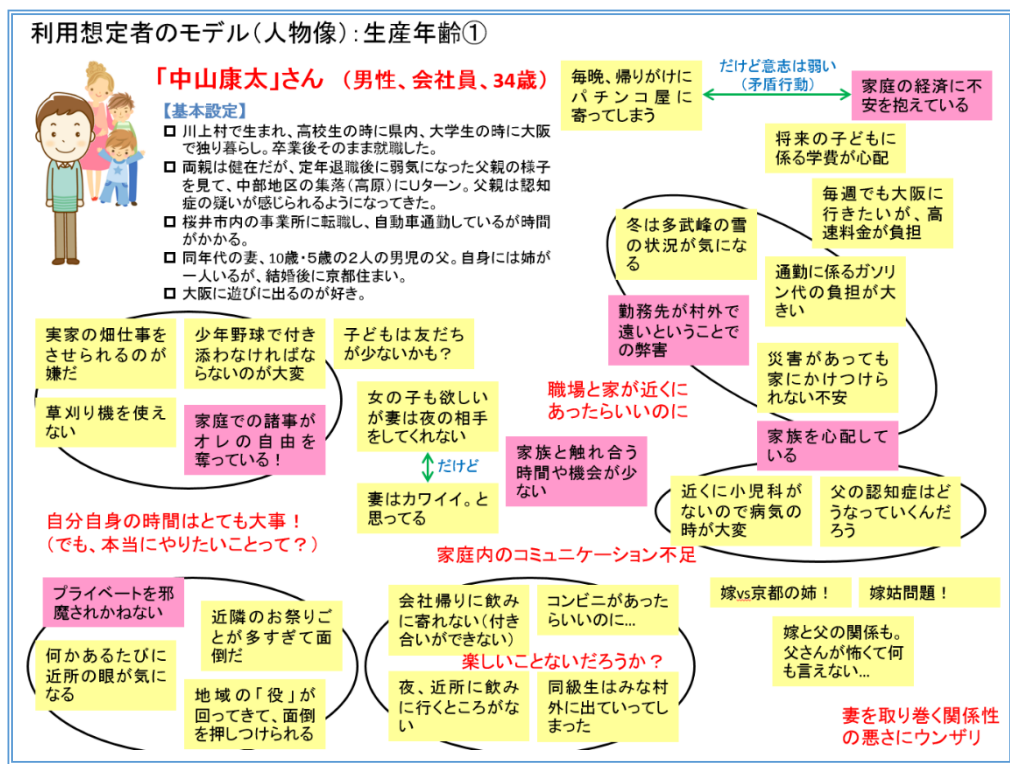
フェーズ 1

➤ 村民気質や状況を踏まえて設定した6つのペルソナとその家族



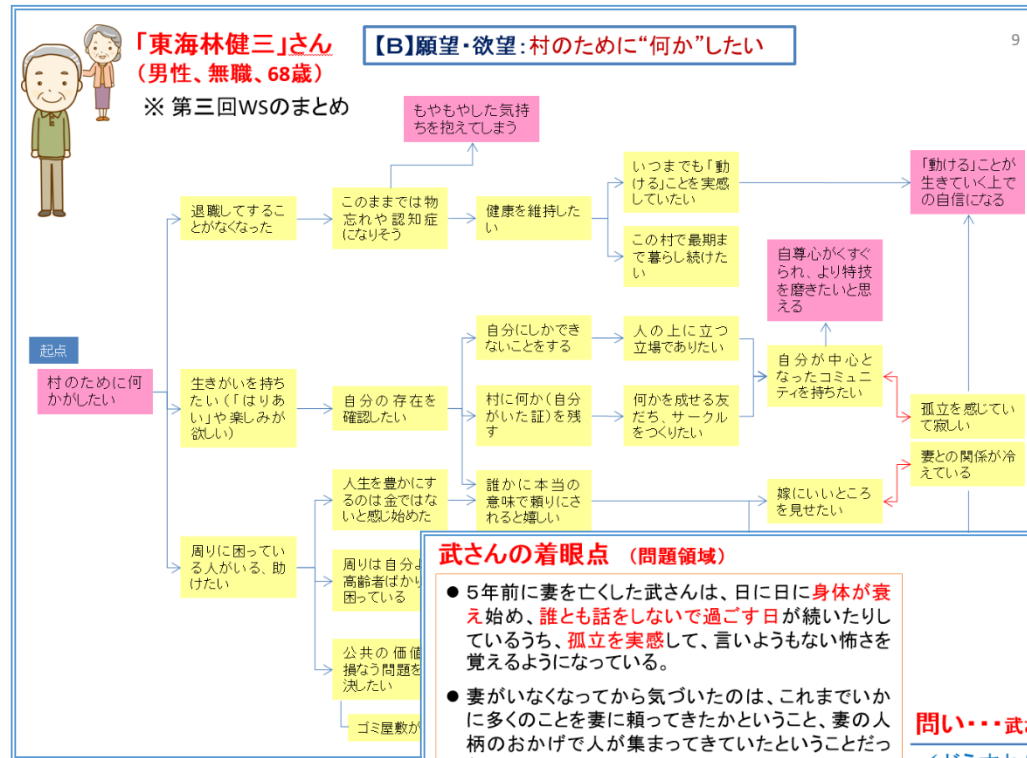
フェーズ 1

➤ 困り事の抽出と関係性の整理



フェーズ2

➤ 地域包括ケアシステムづくりの基礎となる「住みつけられる」ための想いを起点とした「なぜ?なぜ?」分析による深掘り



フェーズ2

➤ 着眼点(問題領域)の設定・文章化と「問い」の設定

問い・・・武さんの「幸せ」のために

- ✓ どうすれば生活の質を5年前の水準くらいまで引き上げられるか(楽しみ、食事、衛生、外出等)?
- ✓ どうすれば自分でできる、やる気になれるか?
- ✓ どうすれば身体機能の衰えを軽減できるか?
- ✓ どうすれば認知機能の衰えを軽減できるか?
- ✓ どうすれば必要な情報と接触し、入手することができるか?
- ✓ どうすれば自分の存在に他人が関心をもつか?
- ✓ どうすれば最低でも1日1回、誰かと会話することができるか?
- ✓ どうすれば他人に誤解されずに意志を疎通することができるか?
- ✓ どうすれば遠く離れた家族(子・孫・ひ孫)とコミュニケーションをとれるか?
- ✓ どうすれば女医(のような存在)とつながりを持ち、会うことができるか?
- ✓ どうすればこの村で最期の時を迎えられるか?



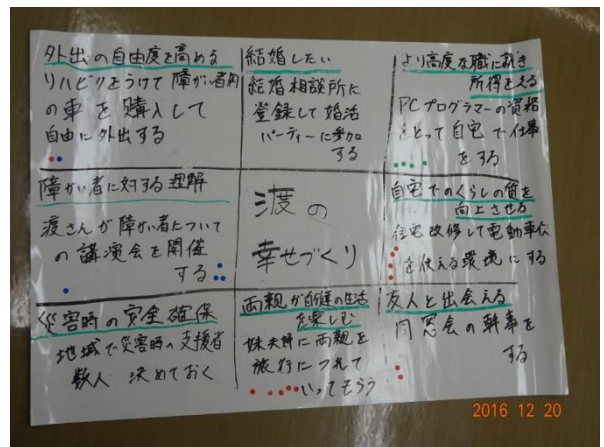
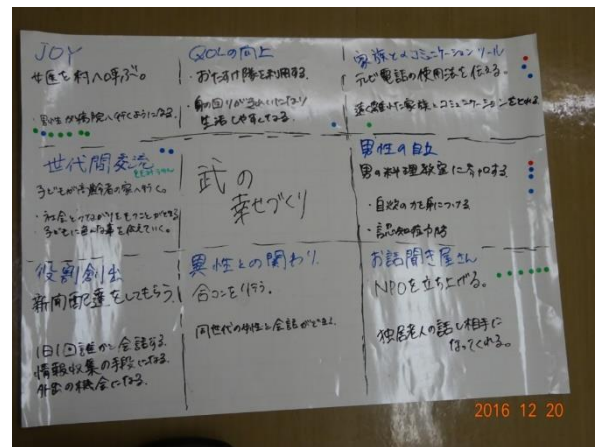
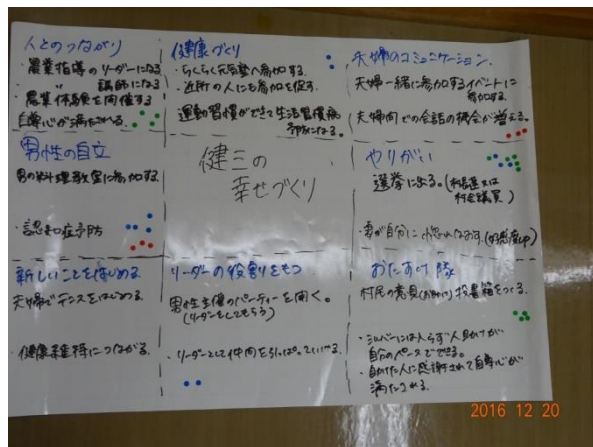
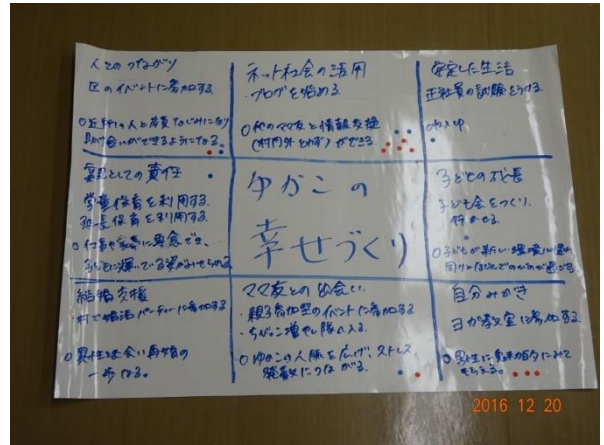
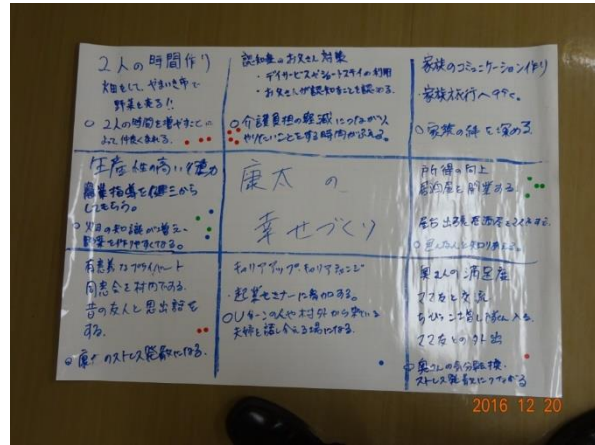
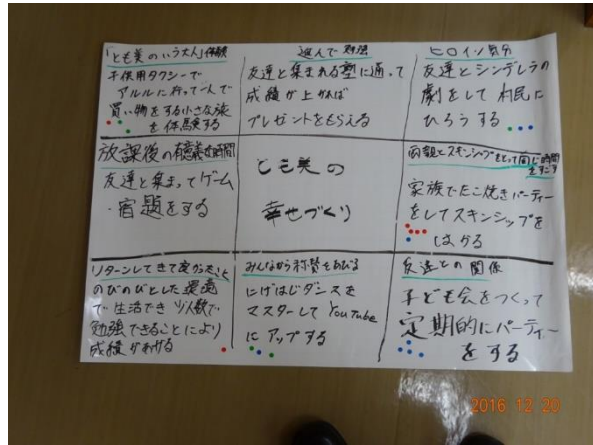
5 取組の進捗状況について

フェーズ3

➤ 村民が「住みつづけられる」アイデアの創出・まとめと、投票(評価)

投票用シール

- ×6枚/人 【実現性】「できそうだな」と思うアイデアのセルに1票
- ×6枚/人 【有用性】「効果がある」、「広げられそう」と思うアイデアのセルに1票
- ×6枚/人 【革新性】「斬新だ」、「あまり他で聞かない」と思うアイデアのセルに1票

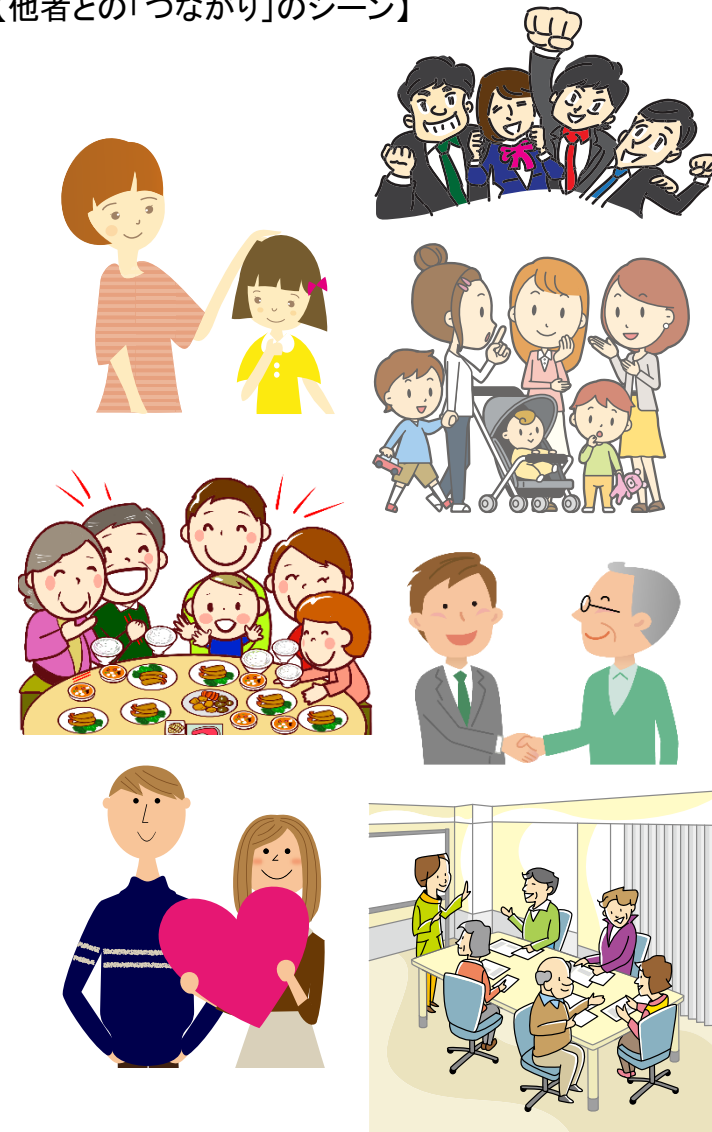


5 取組の進捗状況について

ワークショップを通じた気づき
(『川上らしさ』を育むために欠かせない論点)

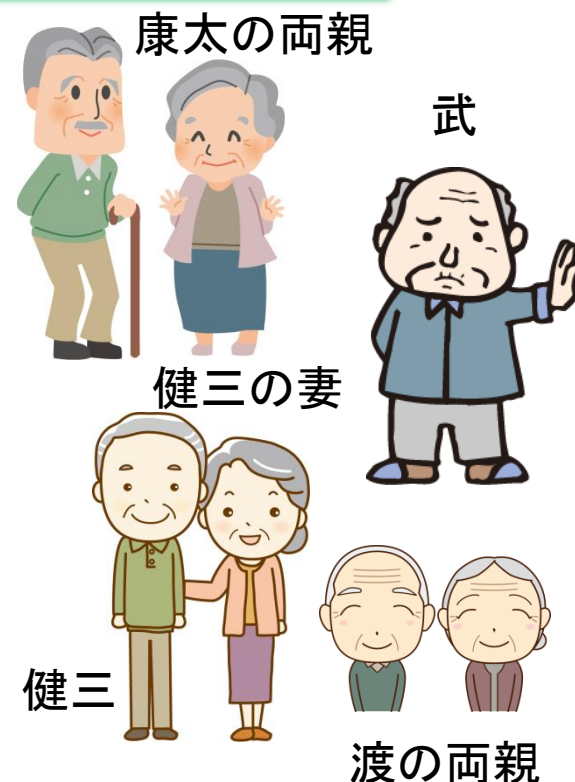
- すべて的人是、大なり小なり、**他者との「つながり」**を強く求めている。
- 本人の「幸せ」は、**自分らしさを追求する結果としての「つながり」**によって実現し得る。
- ペルソナ本人のみならず、**関係する周囲の人間の「幸せ」**も大切。すべての登場人物に寄り添って考え、俯瞰してみると、地域の課題としてより大きな問いが見えてくる(小さな問いへの解の積み重ねが**「都市にはない豊かな暮らし」**)
- 投票(評価)結果からの気づき
 - 実現性の高そうなアイデア
 - ✓ 既存の制度や現有の知見・人材などを応用・活用することで実現可能性が高まる
 - 有用性の高そうなアイデア
 - ✓ 関係する他課・関係機関等との連携を深めることで実現可能性が高まる
 - 革新性の高そうなアイデア
 - ✓ 新たな社会資源を開発する必要性が高い。既成概念や従来の枠組みにとらわれることなく考える必要がある)

【他者との「つながり」のシーン】



5 取組の進捗状況について

ペルソナ本人だけではなく、あらゆる登場人物に寄り添って考える



◆ いずれ1度はこの村を離れることとなる子どもたちは、どうすれば「つながり」を持ち続けられるか？

今後の村の希望の星

◆ 村外のことを知っている世代は、どうすれば「この村ならではの何か」を手にすることができるか？

今後の移住者たちのロールモデル

◆ 人生の後半戦を生きる世代は、どうすれば最期まで自尊心を持って生き抜くことができるか？

今を生きる人たちの心の支え

解

解

解

『都市にはない豊かな暮らし』



6 部局横断的検討体制について

- ワーキング・グループ
 - ・ 住民福祉課(全役職員)
 - ・ 川上村国民健康保険 川上診療所(事務長)
 - ・ 川上村社会福祉協議会(スタッフ2名)
 - ・ 一般社団法人かわかみらいふ(事務局長)⇔定住促進課
- 検討協議会(予定)



7 今後の予定・展開方針

1月

- 検討協議会
 - ✓ 方向性の協議・確認等
- ワーキング・グループ
 - ✓ 4つの「仕組み」の具体化等

2月

- ワーキング・グループ
 - ✓ 先進地の視察研修
 - ✓ 他課・関係機関等との意見交換等

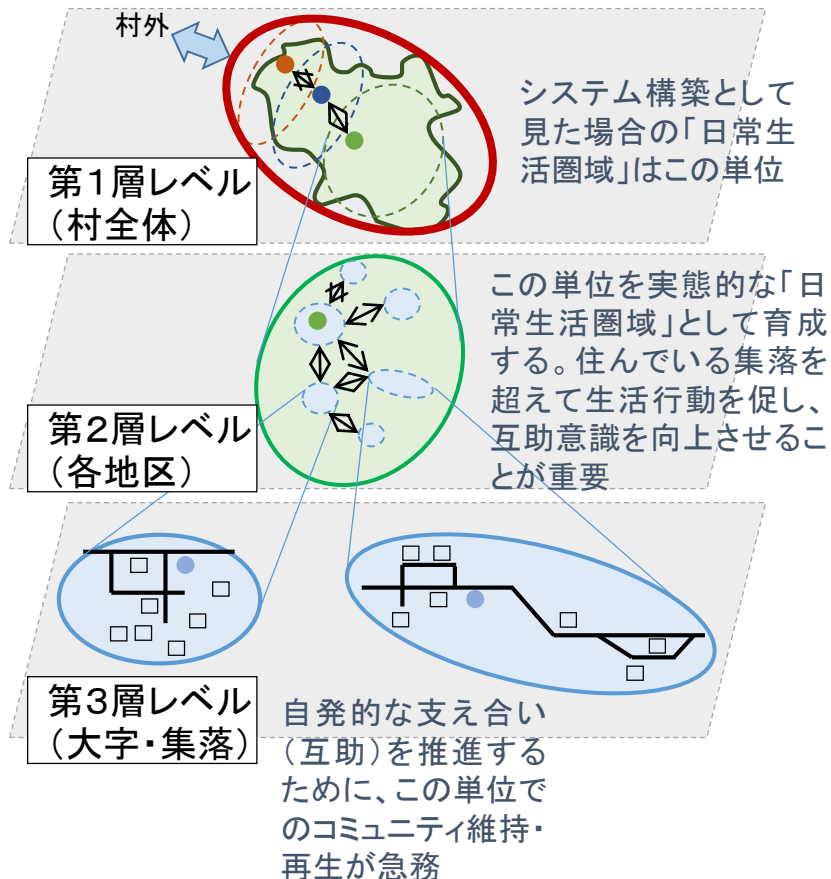
3月

- 検討協議会
 - ✓ 構想と次年度以降の進め方の検討等
- ワーキング・グループ
 - ✓ 地域に合ったシステム(仕組み・体制)等

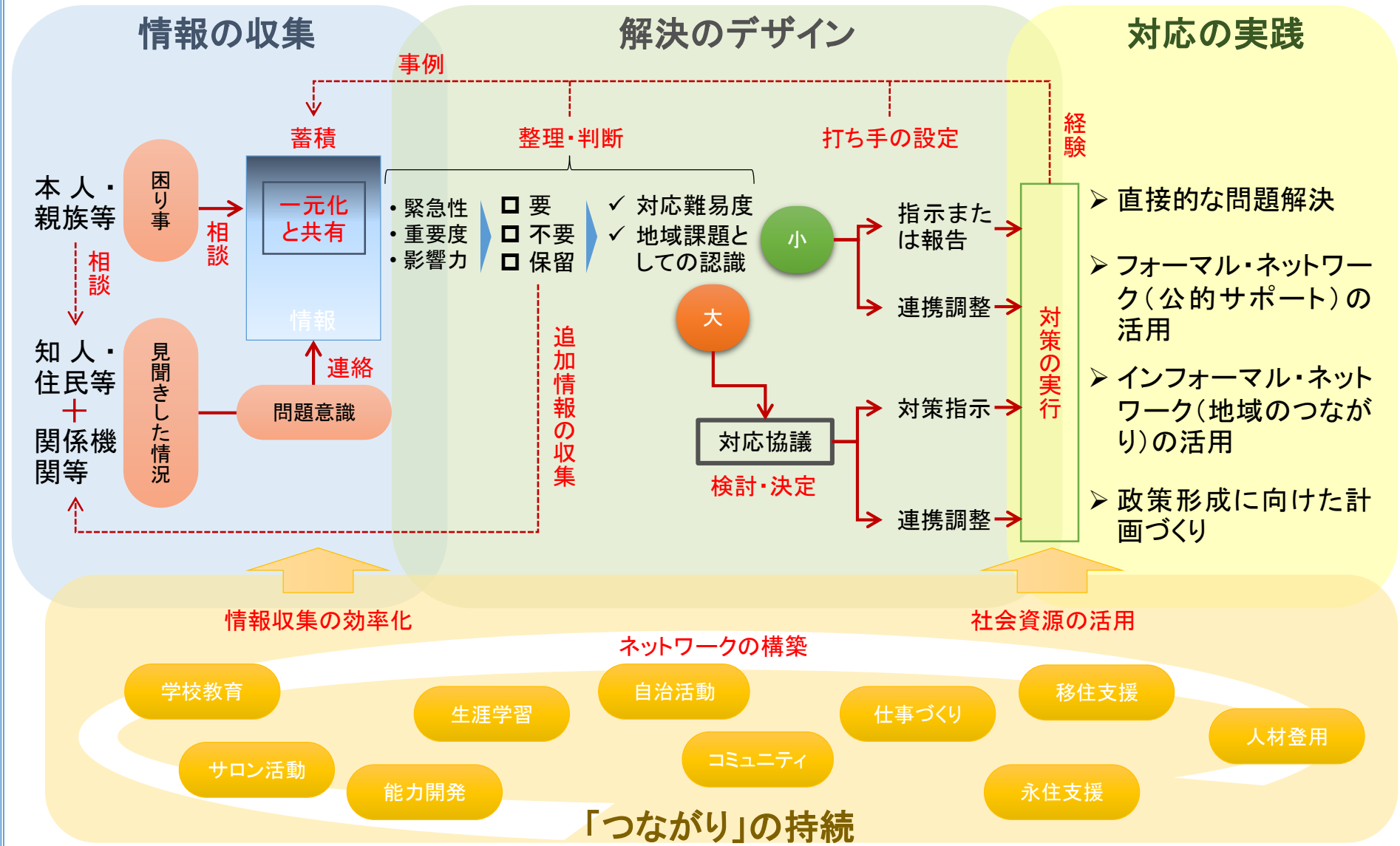
4月以降

- 地域包括支援センター機能の検討・具体化
- 地域福祉計画の策定(システムの位置づけ)
- システム運用によるサービス提供、新たな課題への対応(アイデアの具体化・実践)

【生活行動に即した3層構造のマネジメント】

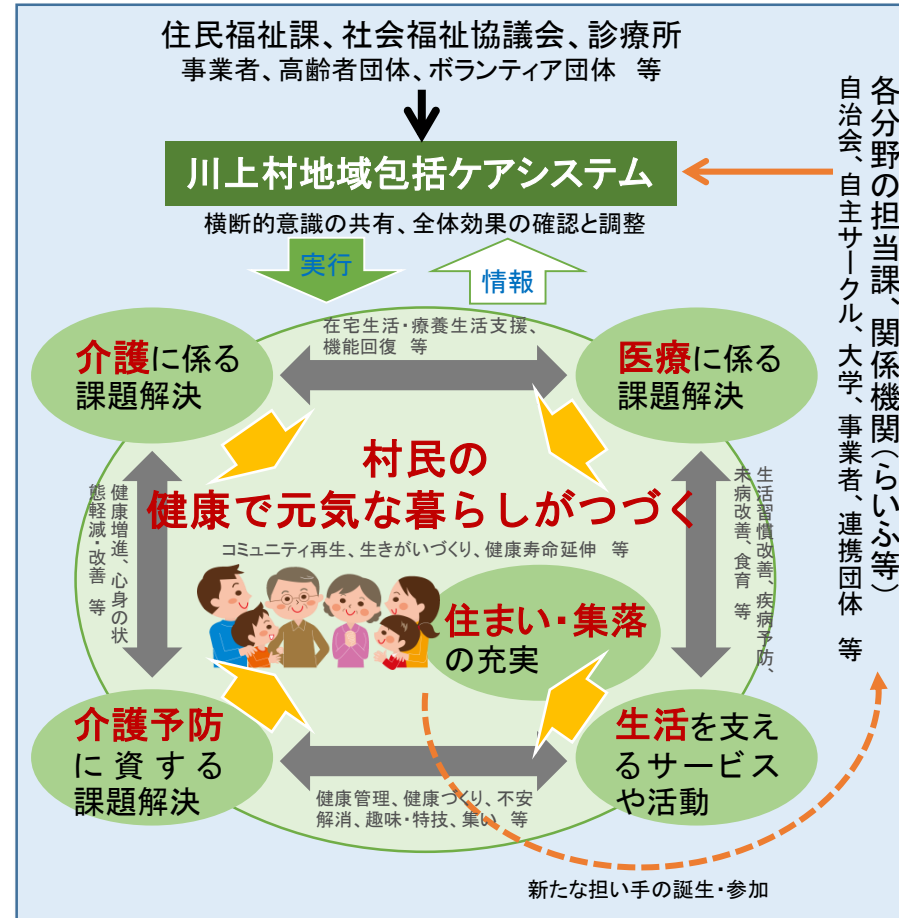


【地域包括ケアシステム構築に向けた4つの仕組み】



7 今後の予定・展開方針

- 医療・介護等に限らず、多様な課題に対応した様々なサービスや支援策が、住民の真のニーズに応じて「**一体的に(あたかも一つのチームから)提供されている**」ように感じられるようにする。
- そのために、川上村の資源(専門的なサービスを提供する各主体)が、**問題意識や目指すべき方向性を共有した上で、互いに連携しながら個々のサービスを提供する。**
- 村民の利便性を高めるための個々の取組が、分野や主体、地域の枠を超えて他の課題を解決することにも寄与し、結果的に**すべての住民の満足度が一層向上する「つながり」**を作る。
- 必要なサービスを提供する上で村内だけでは解決できない課題は、**共感してもらえる村外の事業者や大学等の専門機関等との「つながり」**を作り、「**一体的な提供体制**」の仲間として組み込んでいく。



◆ この具体化に向けて、現有資源のポテンシャルを適切に見極めつつ、固定観念にとらわれないより創造的な発想で『川上らしい』地域包括ケアの仕組みづくりを進める。